

前号で、浅草紳士録ともいふべき『浅草人物史』（大正2年 實業新聞社刊）から、弾家の空き屋敷に移り住んだ、寺島屠獸場社長で浅草区会議員、八田浪之助なる人物を紹介したが、この本には弾直樹の大番頭だった石垣元七の名もあるので、併せてご紹介しておきたい。

旧東京市収入役 旧東京市会議員

故 石垣元七君

「今や東京市は、自治団体として膨大なる賤政を擁し、多くの機関備わり市政の運用極めて円滑なりといえども、十年乃至二十年前に遡り観察せば、今昔の感に堪えざるもの多し。（中略）…収入役たるものは一日といえども、その職に安んずる能わざるなり、何となれば、市はこの時代に多くの事業を計画し、いわゆる都市政策を確立せしを以って歳出は常に歳入を超過するの例なり。したがって収入役たるの地位は、重且つ大にして手腕識見共に一世に卓越せる人物ならずんば、実際に臨み、賤政の調節をなし能わざりなし。こゝに伝えんと欲する石垣元七君は、先代元七氏の長男にして、文政十年東京市浅草亀岡町に生れる。資性豪毅にして堅忍不拔の精神に富み、人の難に先んずる風あり、幼少より学を修め、父を扶けて皮革商を営みしが、業を廃し公共のために尽さんと、粗衣粗食に甘んじ、公会席上といえども木綿羽織に小倉袴を着して意に介するところなし。（中略）…市会に臨むや、公明正大なる心を持し、権勢に屈せず金力に怯まず、数多の議員をして瞠若せしむ。東京市収入役に挙げられ在職数年、市賤政の基礎を確立せしめしが、惜しいか

な三十四年、七十五歳の高齢を以って逝去せり。（浅草区亀岡町三丁目）」とあり、これ以上ない賞賛の追悼文である。

高橋梵仙報告の『部落解放と弾直樹の功業』（昭和11年 社会事業研究所刊）の巻頭写真頁に、弾直樹夫妻の写真と共に石垣元七の肖像画も載っているので、よい機会なので掲載させていただいた（写真参照）。写真説明によると、「弾直樹 こゝに掲ぐるものの他に全身を撮れるものがある。何れも明治四年三月、五十歳の時に自邸茶室前にて撮影せるものである」とあり、石垣元七については「こゝに掲ぐるは、五十五六歳頃の肖像画にして」とあるが、勿論これは初代元七氏である。

